ランボー、ジッド、そしてカミュへ

—『地の糧』の系譜の素描—[1)]

立　川　信　子

ランボー（1854－91）もジッド（1869－1951）も何故日本に愛読者が多かったのだろうか。両者は作品だけでなく類似した点がかなりある。作品だけでなく、人生そのものへの読者の関心、二人の人生で旅、アフリカが果たした役割、また、後世に、特に若い世代に及ばした影響などが挙げられる。ランボーの詩作は青年期の半ばで終わっている。また、ジッドの『地の糧』は若者を熱狂させた。このような類似は表面的なものなのだろうか。そして、それを後世はどう感じたのだろうか。

アンドレ・ジッドは象徴主義の詩人として文学を始め、『アンドレ・ワルテルの手記』『ナルシス論』（1891）、『ユリアンの旅』『愛の試み』（1893）を経て、『パリュード』（1895）『エル・ハジ』（1896）『地の糧』（1897）で象徴主義から決別したと一般的に言われてきた。「最初のアルジェリア旅行以来ジッドは感覚的な世界の重要性を発見した。芸術家にとって読者の必要性を肯定し始めた。この二つの現実は絶対に匹敵するためマラルメが否定したものである[2)]。」近年にもジッドの象徴主義について詳細な研究がなされている[3)]。象徴派の中でジッドが直接接して影響を受けたマラルメの純粋性や対象から独

1）本論文は『ジッドはランボーに何を見たか』（『流域』69号、青山社、pp. 32-38, 2011年）を発展させたものである。

2）«Stéphane Mallarmé»（1898, 10月 ）, in Gide, André, *Essais critiques*, Gallimard, 1999, la Pléiade, p. 1210. *EC*と略す。

立した創作という芸術観はジッドの中にモデルとして存在し続けた。

> この人のそばではじめて思考の現実を感じ、触れた。人生でさがしていたもの、求めていたものが、愛していたものが存在した。一人の人がここですべてをそれに捧げていた。マラルメにとって文学は目的、そう人生の最終目標でさえあった。ここでは文学が本物で現実であると感じた。マラルメがしたように文学にすべてを捧げるためにはひたすら文学を信じなくてはならなかった。私たちの文学史上これ以上盲目的な確信の例があるとは思わない。（*EC*832）[4)]

現在までのジッドに関する研究では、ランボーについてはほとんど言及されていない。その理由としては、ランボーの作品解釈が容易でないこと、ジッドは初期には詩作をしているが、小説創作が中心であることが理由として考えられる。しかし、ジッドはランボーを常に高く評価している。まずジッドがランボーに接した過程を検証し、次に、ジッドの作品との関係を分析することで、ランボーがもたらした意味を考察することができるだろう。そして、後世への影響をカミュの評論に見てみよう。

1　ジッドはランボーをどう読んだか

ジッドの青年期に、ランボーの作品は主にその死後出版されて行った。ジッドの日記、評論、手紙にはランボーについての記述が散在している[5)]。第二次世界大戦の中1941年に評論を書いている。ジッドが監修した『フランス名詩選集』（1949）には次の詩が収録されている。「谷間に眠る男」、「初聖体拝受」

3）Wittmann, Jean-Michel, *Symboliste et déserteur,* Honoré Champion, 1997.
Michelet Jacquod, Valérie, *Le roman symboliste : un art de l'«extrême conscience»,* Droz, 2008.
4）«Stéphane Mallarmé», Gide, André, *EC.*　下線部分（原文ではイタリック）はジッド自身による。

２、８、９、「七才の詩人たち」の一部、「酔っぱらった舟」、「虱をとる女たち」、「母音」、「渇きのコメディ」１、３、４、５、「恥」、「一番高い塔の歌」、『地獄の季節』から「ことばの錬金術」「飢餓」（「錯乱II」）。反キリスト教、キリスト教と社会道徳を強いる母への反抗、異国の物語を読む少年、飢えや渇き、田園の自然を歌っている詩が多い。

ジッドは特に1890年代の前半にランボーを愛読していた。多くの読書をし、多数の文人について日記などに書いている。従って、後半にはランボー一人についてではなく、ボードレールなどと並んで言及されていることが多い。初期はピエール・ルイス、特にヴァレリーの影響が大きかったことは書簡からわかる。特に1893年頃から1894年末の間に創作された『パリュード』『エル・ハジ』『地の糧』の創作にはランボーの詩がインスピレーションを与えていたのではないかと推測することができる。

1891年ヴァレリーが写して送った「酔っぱらった舟」を読んでいる。（*C*155, 1891）翌年にも詩を引用している。「えもいわれない追風が時々私に翼をあたえた」«Et d'ineffables vent m'ont ailé»（「酔っぱらった舟」）（*C*195, 1892）『イリュミナシオン』にも夢中になる（*C*196, 1892）。

1894年に「ランボーが死んだらしい」と死が伝わっている（*JI*188, 1894）。ヴァレリーに次のように書き送っている。「書くことができない。無気力、ヒステリー、愚かさ。あるランボーの一編の詩の思い出で生きている。ジュネー

５）Gide, André, *Journal I 1887-1925,* Gallimard, 1996, la Pléiade. *JI*と略す。
Gide, André, *Journal II 1926-1950*, Gallimard, 1997, la Pléiade. *JII*と略す。
Gide, André, *Anthologie de la poésie française,* Gallimard, 1949, la Pléiade.
Gide, André, *Romans et récits , œuvres lyriques et dramatiques I II,* Gallimard, 2009, la Pléiade. *RI*, *RII*と略す。
Gide, André, Valéry, Paul, *Correspondance 1890-1942*, Gallimard, 2009. Cと略す。
Gide, André, Louÿs, Pierre, Valéry, Paul, *Correspondance à trois voix, 1888-1920,* Gallimard, 2004.
Rimbaud, Arthur, *Œuvres complètes,* Gallimard, 2009, la Pléiade. *RPl*と略す。
アルチュール・ランボー /宇佐美斉訳『ランボー全詩集』（筑摩書房、1966）ランボーの詩の訳の大部分はこの訳による。ただし、一部ジッドの解釈と一致しない箇所は筆者訳にする。

ヴでピエール（ルイス）が私に読んでくれた、もうよくわからない詩。緑の柱とアプサントの詩だ。」（*C*299, 1894, ８月）ルイスから「渇きのコメディ」を聞いたのである。また同じ８月にランボーに熱中していることがわかる。

> 三週間前からランボーしか読んでいない。今までは合間にする読書でしかなかった。今はランボーだけで十分だ―そしてそこに完全に『自分の考え』を見る。それで私は十分に満足です。なぜなら、そこに今は他のものが常に可能であることがわかるからです。さらにランボーは知的で穏当でないほどです。この人生の激しさ、味わい…私はまさにシエクスピアを考えます…時として…それをあなた（ヴァレリー）から送られた『イリュミナシオン』の中に私は読みます。[…]
>
> ランボーに関する部分は馬鹿げています。削除してください。（*C*301－302, août 1894）。

同年末『パリュード』を創作している時に「ランボーを食前酒のように一気に飲み干す」（*C*314, 1894, 11月）。12月にも『パリュード』の創作とともに自分の状態をランボーの詩句にたとえている。「もろい小舟」«bâteau frêle»（「酔っぱらった舟」）（*C*315－316, 1894, 12月）。

1895年１月ジッドは『地の糧』の構想している頃ランボーの詩句「おお、季節よ、おお、城よ。」«Ô Saisons! Ô Châteaux!»を引用した後次のように書いている。「もうシンボルはよそう。私の身振りは厳かになり、あたかも人々は私を通して自然と交信しているかのようだ。私はさまよう者となる。青春の終わり」（C329, 1895）

その後、特にランボーに注目していたという記述はないが、高く評価することは変わらない。1895年出版されたランボーの全集についてジッドは知らないと書いている（*C*371, 1895）。1900年の読書ノートにまだ名前が挙げられている。（*JI*292, 1900）。1905年「七才の詩人たち」を再読。「ランボーや『マドロールの歌第六』を読むと自分の才のなさを感じる。」（*JI*489－492, 1905）1940年

にもランボーは後世に読まれると書いている（*JII*728, 1940）。その間次々に発表されるランボーに関する批評、特に否定的な批評に批判的である。グールモンのランボー批評を批判している（*JI*489－492, 1905）。ジャック・リヴィエールのランボー論を酷評している（*C*740, 1914）。

後年には同性愛の問題が焦点になる。ランボーについて、アフリカのランボーの描写の後、クローデルとの対話が1912年２月の日記に記載されている（JI742－743, 1912, 12月）。クローデルはキリスト教徒としてランボーを解釈したこと、ジッドが同性愛を暗示する場面を小説に描いたことで二人の関係が破綻したことはよく知られている。クローデルは全集の序文を書いたが、その「ランボー研究」の中で、「ランボーの性格の激しさ」をぼかしていること、『地獄の季節』に偏り『イリュミナシオン』を軽視していると批判している。同性愛を軽視し、キリスト教への回帰という解釈をしすぎているということであろう。同性愛は、官能性や欲望を否定するものとしてのキリスト教の否定につながっている。

ヴェルレーヌとランボーの関係を同性愛よりは詩人としての関係から解釈する説は当時から出されていた。ジッドは詩作の上での、両者の影響関係には否定的である。ジッド自身は日記や評論で多くの文学について語っており、ジッドの創作に与えた影響の研究も少なくない。しかし、そのジッドには逆説的に見えるかもしれないが、影響とみえるものは外的な発見ではなく内発的なものを助長していると考える。ジッドによるとランボーとヴェルレーヌの関係は1941年の評論でも謎であるが、ランボー側から影響を与えている方が大きく、大部分知的なものである。ただ彼らの放浪生活ではそれだけではないかもしれないと暗示している（*JI*715, 1914, ２月）[6)]。

6）「文学における影響について」（1900年３月29日ブリュッセルの自由美学でなされた講演）（*EC*404－417）
ランボーのヴェルレーヌに対する影響もそれほど大きくないと言っている。（『ヴェルレーヌとマラルメ』1914, *EC*510）

また、少しずつ同性愛の社会的認知を求める方向に進んでいったジッドにとって、ランボーの例の意味は大きかっただろう。ただ、同性愛にかなりの意味の違いをみることはできる。ジッドにとって、ランボーの同性愛は追求と冒険としての文学の一部であった。従って、ランボーはたぶん文学とともに同性愛にも終止符を打ったと考えている。ジッドは『コリドン』（1924）に書かれているように、古代ギリシャで成人男性が青年を教育するときと同じく、同性愛に教育的な意味を見ようとしている。初期のアラブの少年、後年のマルクとの関係にはジッドが教師の役割をしている部分も見られる。いずれにしても、ジッドがランボーの同性愛にみたような創造のための実験というよりは、一時的な例を除けば、恋愛というべき要素が大きかったであろう。

1927年恋人の帰りを待ちながらジッドは自分の思いを「最も高い塔の歌」の詩句で表現しているのもこの文脈から理解できる。細かいことに失われた時を憂い夢中になれる時を求めるジッドがランボーの詩を個人的な事柄に近づけて理解していることがわかるだろう。「人は自分のことしか考えないと投げやりになる。私は愛のためにだけ、他人のためだけに努力をする。」

ああ、来らんことを
互いに恋に夢中になる時が
Ah! Que vienne
Le temps où l’on s’éprenne!　（*JII*30, 1927）[7]

2　ジッドにとってランボーの意味

ジッドがランボーに心酔した第一点は1941年の評論で「強烈な個人主義」と評している個性、天才である。それは詩の形式の革新性に現れる。ヴァレリー

7）宇佐美訳がジッドの解釈と一致しない箇所は論文筆者訳にする。

の言葉として「驚異的な発明者」«Prodigieux inventeur»（*EC*858, 1921）、「詩の激しさ」«fureur poétique »（*EC*888, 1935）という性格である。1915年第一次世界大戦中はジッドがもっとも国家主義的な考えに接近した時期である。その時期に書かれたためランボーをフランス的として次のように書いている。「私たちの過去の伝統とはまったく似ていないが、そのためにフランス的でないということはない」（*JI*895, 1915）。

後にはむしろ、詩法の拘束性の方に注目している。1925年「大きな関」と表現している（*EC*658, 1925）。1942年『想像のインタヴュー』でも詩は法則なくしてはなく、詩法とは人工的なものであり、作品は厳密な詩法の規則によっている。クローデルやランボーやアポリネールも同様と考える（*EC*375）。古典主義の文学概念が表れている[8)]。

同時に「フランス語の多様性」を賞賛している。スカトロジーも含めて自由な表現力にジッドは圧倒されているのである[9)]。多様性とはジッドにとってはフランスという国の文化をはじめとして、あるべき姿を意味する言葉である。

ランボーの革新性は反キリスト教道徳と社会をはみだす反社会性という特色を持つ。ニーチェの影響によっても説明される。ジッドのゲーテの演劇についての批評の中で、「初聖体拝受」の詩句「エネルギーをいつも盗むもの」«Éternel voleur des énergies»を引用して、キリスト教を批判している。

> ゲーテがキリスト教の中で相容れなかったのは魂に超感覚的満足を与えること、それが追求をそらすこと、想像的なもののために現実と思うことを過小評価すること。肉体、物質の軽蔑、それが神聖性である（*EC*761,

8）Tatekawa, Nobuko, «Les Origines du classicisme d'André Gide»（「日本フランス語フランス文学会誌」76号、124－152頁）

9）以下の中安ちか子論文参照。「Rimbaudにおける冒涜的言辞について」（「フランス文学研究」日本フランス文学会、1962、74－79頁；）、「Rimbaud とVerlaineの関係について」（「フランス文学研究」日本フランス文学会、1960、99－108頁）、「ランボーの友達、エルネスト・ドラエー」（「言語文化研究」松山大学学術研究会、第12号、1933、39－61頁）。

1942)。

そこから田園と都市、渇きのような、ジッドの『地の糧』『背徳者』と共通するテーマが生み出されることになる。社会の外にいる者、放浪と冒険をする者としてのランボーはジッドの主人公、特に私生児enfant naturelのモデルの一つとなっていると考えられる。『背徳者』のミシェル、『エル・ハジ』の予言者、『法王庁の抜け穴』のラフカジオ、『贋金使い』のベルナールに類似する性格をみることができる[10)]。

ランボーの想像力がフローベールの影響を受けていることやニーチェの反社会性などの類似性が指摘されていること、ジッドがフローベールやニーチェから大きな影響を受けていることからわかるように、直接的に続く世代として思想的な継続性を認められる[11)]。次の1896年日記の一節が示すように、これらは青年ジッドに同時に受容されたのである。「ランボー、続けてニーチェの『反キリスト』を読む」(*JI*242, 1896)[12)]。

ジッドは多くの旅をしたが、「旅人」の例にランボーを挙げている(*C*673, 1908)。第二点は、そういう親近感と高い評価にもかかわらず、ランボーの人生を破綻とむしろ表現するようになることである。ジッドがマラルメを追悼するために書いた文の中で「ランボーは失敗した」(1898, *EC*832)とすでに言っている[13)]。1941年の評論ではランボーの作品には矛盾した解釈が可能であると言っているが、革新の試みと冒険の果てに人生の破綻があるという見方は決定

10)平井啓之『ランボーからサルトルへ―フランス象徴主義の問題』(講談社学術文庫 1989)ではランボーの美学と無償の行為との類似性が指摘されている。

11)«La grande vraisemblence［…］l'influence de *la Tentation Saint Antoine* de Flaubert, qui fut publié en avril 1874 sur *Barbare, Enfance I* et *Villes I et II*»
Yves Bonnefoy, *Rimbaud,* Seuil, *écrivain de toujours,* 1961 et 1994, p. 140.
Tatekawa, Nobuko, «L'influence de Nieztsche sur André Gide de 1895 à 1902 -Pour la création de *L'Immoraliste-*»(「愛媛大学教養部紀要」26号, 1993, pp. 51－66).

12)ヴァレリーも『イリュミナシオン』と『神々の黄昏』を関連させている(C202, 1892)。

13)«Stéphane Mallarmé»(1898)EC829－832

的である。

> その青春の作品にあらゆる反抗、沖に出たい危険や冒険、冒涜への欲望、禁じられたものへのどん欲さしか思わないのか。彼の人生の恐ろしい破産、『凶暴な異形、暑い国からの帰還』、『不動の断片』、それがあの「酔っぱらった舟」となったものを忘れるのだろうか。

すでに見たように、ジッドの青年の頃ランボーの詩の意義が徐々に広く理解されるようになり、文学は冒険として人生に大きな意味を持っていた。ランボーの人生については、破綻と考え、極端な個人主義の弱点として批判することになる。しかし、それもまたフランス文化の一面として、強烈な個人主義としての価値を認め、ランボーの天才を讃える。当時支配的になっていった国家主義という集団主義的な考えに対抗して評論を書いているからである。また、ファシズムや共産主義の動きの激しい世情の中でジッド自身が個人主義の二面性について絶えず問いかけることになったのである。最近のジッドの研究でも国家主義と個人主義の間で振幅しながら、均衡という概念から離れないことが論じられている。そこに多民族社会として多くの問題をかかえるフランスでのジッドの今日的意義を見いだしている[14)]。さらに、人生から遊離していると感じた部分から離脱すること、すなわち人生と文学が結びついたものへ、また『新フランス評論』誌（*NRF*）創刊にも見られるように、ランボーの破産を通して、むしろ文学の社会化の活動に向かったと言えるだろう。

ランボーとジッドには、革新性と反社会性という共通性があるだけではなく、両者においては意味が異なるとしても、幸福、出発、自然との融合、主体と客体の融合という一連のテーマを認めることができる[15)]。「私は他者である」

14）Jean-Michel Wittmann, *Gide politique, essai sur Les Faux-Monnayeurs,* Classiques Garnier, 2011

というランボーの言葉は、次のように解釈されている。「インスピレーションの意味であって、デカルト的な主体とは区別された主体の直感を育てるものである。無意識というようなものではないが、自己の中にある『多数』を感じているのである[16)]。」いずれにしてもボードレールから見られる、自己と他者の合体による自己の複数性の発見といえるものでる。ジッドの自己と創作概念に受け継がれて、ジッドにとって、自己は絶えず他者に浸食され変身していくものとして意識されている[17)]。その共通のテーマから田園、飢え、砂漠、アフリカ、曙、船というようなイメージの象徴的意味に共通性が見ることができるだろう。ただし、ジッドの方がはるかにメッセージは単純で明瞭である。

渇きは放浪者ランボーに本質的な主題であるとされているが、ジッドが編纂した詩集に収録されている[18)]。

3　友達

来たまえ　酒が浜辺に打ち寄せる
数限りない波浪ではないか

15）«Jette mon livre et quitte-moi.»（*Nourritures Terrestres,* RI1444）, «Départ»•RPL296, «Adieu»（*RPL*279－280）
「幸福は私の宿命だ」「今度は絶対的出発、深みへの出発、［…］太鼓、ダンス、ダンス…主体と客体、自然と人との間のあらゆる区別の消滅」«Le Bonheur était ma fatalité » « Départ absolu, cette fois, départ en profondeur［…］tambour, danse… effacement de tout distinction entre objet et sujet, nature et personne » Yves Bonnefoy, *op.cit,* p.79, p.120－121.

16）Jean-Luc Steinmetz, «Présentation», Rimbaud, *Œuvres complètes,* établissements du texte, présentation, notices, notes, chronologie et bibliographie par Jean-Luc Steinmetz, Garnier Flammarion, 2010, p. XII.

17）Cf. Tatekawa, Nobuko, «L'influence de Flaubert sur les œuvres d'André Gide de 1902 à 1909»（「愛媛大学教養部紀要」27号、1991、pp. 57－70）

18）アルチュール・ランボー /宇佐美斉訳『ランボー全詩集』（筑摩書房、1966）、p. 186；「『親』『精神』『友』は渇きをしずめる方法を提案する。［…］　動物も『渇く』それはうらやましく思える。しかし、究極の渇きは雲の渇きである。雲は通り過ぎ、溶け、自然を潤し、森の菫の上に息絶える。」（RPl897）；「自己は密かな声にとらわれている。真の内的ドラマのやり取りが聞こえる。自分のさまざまな可能性のそれぞれの前で、ランボーは決めている。常に欲望の対象そのものとの合体を選んでいる。」«Notes», Rimbaud, *Œuvres compètes,* GF, *op.cit*., p. 341.

見たまえ　天然のビター酒も
山の上から流れ落ちてくる

辿り着こう　かしこい巡礼者たちよ
みどりの列柱に囲まれたアプサントの神殿へ…

私—こんな風景はもう沢山だ　友よ　酔いとは何だろう
いっそのこと池に沈んで
朽ち果てた方がましだ
木ぎれのただようあたり
恐ろしい皮膜の覆われて
［…］
牧場で実をふるわせている鳩も
夜の間も目が利いて走り廻る鳥獣も
水に棲む生き物や　家畜らも
逝き遅れた蝶たちも…同じように渇いている

いっそあのはぐれ雲が消えてゆくあたりで儚くなれたなら
—おおさわやなかものにめぐまれて
あかつきがこの森に敷き詰める
濡れた菫の花床で息たえることができたなら
（「渇きのコメディ」）

III

Les amis

Viens, les Vins vont aux plages,
Et les flots par millions!
Vois le Bitter sauvage
Rouler du haut des monts!

Gagnons, pèlerins sages,
L'Absinthe aux verts piliers...

Moi – Plus ces paysages.
Qu'est l'ivresse, Amis?

J'aime autant, mieux, même,
Pourri dans l'étang,
Sous l'affreuse crème.
Près des bois flottants.

V
Conclusion
Les pigeons qui tremblent dans la prairie,
Le gibier, qui court et qui voit la nuit,
Les bêtes des eaux, la bête asservie,
Les derniers papillons!.... ont soif aussi.

ジッドが編集した詩集に収録されている『地獄の季節』「錯乱II」は飢えを中心テーマにした部分である。

言葉の錬金術
[…]
—
鳥たち　家畜の群れ　村の女たちから遠く離れて
僕は何を飲んでいたのか　優しいはしばみの森に囲まれた
あのヒースの生い茂った荒野にひっざまずいて
あたりには生暖かい緑の昼さがりの霧がたちこめていた

あの若いオワーズの流れからぼくは何を飲むことができただろう
—物いわぬ楡の若木　花咲かぬ芝草　曇った空
かけがえのない自分の小屋から遠く離れて　あれらの黄色い瓢箪(ひさご)から
何を飲むことができたろう　何やら汗をかかせる黄金のリキュールばかり

ぼくは旅籠のいかがわしい看板になっていた
—嵐がやってきて空を追い払った　夕方になると
森の水は手つかずの砂の飢えに消えていった
神の風が氷の粒を沼に吹きつけていた

泣きながら　僕は黄金を見ていたが—飲むすべはなかった—
[…]
　「飢餓」
ぼくに食い気があるならば
土くれと石ころに対するくらいのもの
いつも食べているのは　空気と
岩と　石炭と　そして鉄

ぼくの飢えよ　まわれ　飢えよ　食べる
　　音の牧場で
昼顔の陽気な毒を
　　引き寄せるのだ
砕かれた小石や
教会の古い石を食べろ
昔の洪水がもたらした川原の石ころ
灰色の谷間に撒かれたパンを
—
狼は葉陰で吠えていた

食事にした鳥の
美しい羽を吐き出しながら
あいつと同様ぼくも憔悴する

サラダ菜や果物は
ただ摘み取りを待つばかり
けれども垣根の蜘蛛は
菫しか口にしない

眠りたい　煮えたぎりたい
ソロモン王の祭壇で
煮汁の泡が錆のうえを走り
セドロン川に流れ込む
（『地獄の季節』「錯乱II」）[19]

Alchimie du verbe

Loin des oiseaux, des troupeaux, des villageoises,
Que buvais-je, à genoux dans cette bruyère
Entourée de tendres bois de noisetiers,
Dans un brouillard d'après-midi tiède et vert?
Que pouvais-je boire, dans cette jeune Oise,
--Ormeaux sans voix, gazon sans fleurs, ciel, couvert!—
Boire à ces fourdes jaunes, loin de ma case
Chérie? Quelque liqueur d'or qui fait suer.

19）詩人が『空気』『鉄』『石』で満たされることに詩的経験の隠喩を見る研究者がいると解説されている。（*RPL*934）この詩の次の節は「ついに、おお　幸福だ、理性だ。」から始まる。

Je faisais une louche enseigne d'auberge.
--Un orage vint chasser le ciel. Au soir
L'eau des bois se perdait sur les sables vierges,
Le vent de Dieu jetait des glaçons aux mares;

Pleurant, je voyais de l'or – et ne pus boire.

Faim

Si j'ai du goût, ce n'est guère
Que pour la terre et les pierres.
Je déjeune toujours d'air,
De roc, de charbons, de fer.

Mes faims, tournez. Paissez, faims,
Le pré des sons.
Attirez le gai venin
Des liserons.

Mangez les cailloux qu'on brise,
Les vieilles pierres d'églises;
Les galets des vieux déluges,
Pains semés dans les vallées grises.

Le loup criait sous les feuilles
En crachant les belles plumes
De son repas de volailles:

Comme lui je me consume.
Les salades, les fruits
N'attendent que le cueillette;
Mais l'araignée de la haie
Ne mange que des violettes.

Que je dorme! Que je bouille
Aux autels de Salomon.
Le bouillon court sur la rouille,
Et se mêle au Cédron. [20)]

ジッドの『地の糧』の一節に同じテーマを見ることができる。メッセージ性は単純であるだけに明快である。

糧よ！
私はあなたを待つ。糧よ。
私の飢えは途中では止まらない。
飢えは満たされてはじめて消える
[…]
私が地上で知る最も美しいものは
ああ！ナタナエルよ、それは私の飢えだ。
飢えはいつも忠実だった。
いつまでもそれを待つものすべてに
ナイチンゲールが酔っているのは酒にか。

20）詩の引用はジッドが名詩選集にのせている詩句に限る。Gide, André, *Anthologie de la poésie française,* Gallimard, 1949. la Pléiade, pp. 658－664

NOURRITURES!

Je m’attends à vous, nourritures!

Ma faim ne se posera pas à mi-route;

Elle ne se taira que satisfaire;

[…]

Ce que j’ai connu de plus beau sur la terre,

Ah! Nathanaël! c’est ma faim.

Elle a toujours été fidèle

À tout ce qui toujours l’attendait.

Est-ce de vin que se grise le rossignol?

（*Les Nourritures terrestres,*　*RI*363－364）

ランボーが去ったアフリカ、特に砂漠とは、ジッドにとっては『背徳者』『エル・ハジ』にみられるように解放と喪失の原点である。それはジッド自身が繰り返したアルジェリア滞在によって、また彼の文学体験によって作り出されたものでもある。

さらに、具体的には船の比喩や曙の役割にそれを見ることができる。『贋金作り』の生存競争を象徴するリリアンの難破船の話（*RII*218－221）。ジッドの物語をしばしば締めくくる暁、『背徳者』がさらなる冒険そして破綻へと向かって旅立つ暁、『法王庁の抜け穴』のラフカジォが自分のこれからの人生を問いかける暁、暁は夜でも朝でもなくその中間点であり、「転身」の象徴である[21)]。

21）中安ちか子「Arthur Rimbaudの『Illumination』に関するノート」（愛媛大学教養部紀要、第10号、1977、171－184頁）

3　ランボー、ジッド、そしてカミュへ

ジッドにおけるランボーの受容は、文学を通しての社会改革という両者に共通のテーマを浮き上がらせる。家族のレベルからみれば、ランボーにとって父は自分を捨てた者であり、母は反抗の対象だった。それから逃れ、同性愛や文学の世界へ、さらにアフリカへと向かったが、最後にはフランスへ戻る途上でなくなった。それが改悛の神話を作らせるもとになった。ジッドはその書簡にみられるようによい親子関係であったが、母は道徳を体現する、逃れたい対象でもあった。ジッドの「家族この憎むべきもの」という言葉はよく知られている。

> 放浪するものは何ももう入ることはできなかった。外の震える程寒い風。—家族、私はあなたを憎む。閉ざされた家庭。閉じられた扉。幸福の嫉妬深い所有。(『地の糧』)
>
> Rien de toutes choses vagabondes n'y pouvait plus rentrer, du vent grelottante du dehors. –Familles, je vous hais ! foyers clos ; portes refermées ; possessions jalouses du bonheur. *(Les Nourritures terrestres, RI 382)*

ジッド自身が自分の家族が特に迷惑だったわけではないと言っているが、晩年妻とは離れて、友人の近くで暮らしいる。ジッドもまた家族に、特に早世した父に代わり唯一の保護者であった母、そして母によく似た妻は自分の人生から消え去って行く存在であった。家族や社会道徳は若者にとっては抵抗の的であるのは当然である。そういう意味では同性愛は彼らの反社会性を掲げる時の旗にもなっている。文明の先進化の過程は伝統的な家族の解体であることはトッドを待つまでもないだろう[22)]。しかし、このジッドの文を読めばわかるように、

22) エマニュエル・トッド、ユセフ・クルバージュ（石崎晴己訳）『文明の接近』（藤原書店、2008）

それは閉ざされた集団を否定しているのである。それは同時にあらたな共同体の創始でもあるのである。ジッドは「新フランス評論」誌の協力者たちなどとある種の共同体を作り上げて行った。

西洋的な個人は日本の知識人にとっては東洋的なものと対照的なしばしば憧憬の対象だった。ジッドもまたその代表として反社会道徳の標識のように考えられることが多い。しかし、ジッドは両大戦の国家主義の厳しい時代を生きて、常に共同体や規律の必要性を強調している。ただ、そのために個人が完全に否定されてはならないと言っているのである。つまり、ジッドにとってランボーは自分の時代の生き方に対する問いかけの例となっていると言える。

そして、こうして、従来の世界の解体とあらたな世界を模索するランボーをみるジッドの眼差しは肯定面から否定面へ移しながらも、強烈なエネルギーに満ちた革新性に対する賛嘆に満ちている。社会変革の中で重要な意味を持つ飢えの象徴的な意味は、キリスト教の超俗的価値観につながるものであり、ニーチェによって当時大きな問題になっていた。ジッドがそれに詩的表現を与える可能性を開拓して行く上で、ランボーは大きな役割を果たしたといえるだろう。そして、その明確なメッセージ化された意味はカミュなどによって受け継がれて行った。カミュがジッドの追悼に書いた文の見るようにランボーよりも明確なメッセージになっているとはいえ、それを受け取るにはカミュは読書体験を積まなくてならなかった。

アルベール・カミュ「アンドレ・ジッドとの出会い」[23)]

私が初めてジッドに出会ったのは16才の時だった。私の教育の一部を引き受けたおじさんが時々私に本をくれた。肉屋でしかも客が多いのだ

23）*Hommage de la N.R.F.,* novembre 1951；採録Albert Camus, «Rencontres avec André Gide», in *Essais,* introduction par R. Quillot, édition établie et annontée par R. Quilliot et L.Faycon, Gallimard, bibiothèque de la Pléiade, 1965, pp. 1117－1121.　訳の下線は論文筆者による。

が、本物の情熱は読書と考えだけだった。午前中は肉の商売をしていたが、後は図書館、新聞、それに界隈のカフェでとどめなく議論をしてすごしていた。

ある日おじさんは私に羊皮紙のカバーの小さな本を差し出した。「面白いと思うよ」と言って。当時私はすべて読んだがわからなかった。『女の手紙』や『パールダイアン』一冊読んだ後『地の糧』を開かなくてならなかった。それらの記述は私にはよくわからなかった。自然の恵みへの讃歌につまずいたのだ。アルジェで16才の時私はその豊かさに飽食していた。私はたぶん他のものが欲しかったのだ。ブリダ！[24] 私は本を叔父に返し、面白くないと言った。それから浜へ、気のそれる勉強へ、暇な時の読書へ、私自身の困難な生活へもどった。出会いはうまくいかなかったのだ。

次の年、私はジャン・グルニエに出会った。彼もまた他のものもくれたが、一冊の本を差し出した。それはアンドレ・ド・リショーの『苦痛』という小説だった。しかし、私は決してそのすばらしい本を忘れない。それは私の知っていること、母、貧乏、空の美しい夕べを私に語った最初の本だった。その本は私の心の底で暗い絆をほどき、名付けることのできないまま私が締め付けられていた桎梏から私を解放した。私はお決まり通り一晩でそれを読み、目覚めた時奇妙で新しい自由で豊かになり、ためらいながら未知の土地を私は進んだ。私は本が単に忘却と気晴らしをもたらすだけではないことを知ったばかりだった。私の頑固な沈黙、この漠然とした崇高な苦しみ、私を取り巻く独特の世界、私の家族の高貴さ、惨めさ、最後に私の秘密、それらすべてが語られていた。解放、真実の秩序があり、そこではたとえば貧困が、私がそうではないかと思い密かにあがめていた本当の姿を突然現した。『苦悩』によって、

24）アルジェから南西46キロも県庁所在地。『地の糧』第７部の断章の冒頭「1895年３月。ブリダ！サエルの花」（*RI*1321－1322）

ジッドが私に入らせるはずであった創造の世界を私は垣間みた。ここで私の二度目の出会いが起こる。

本当に私は読み始めた。幸いな病のために私は浜や楽しみから離れた。私の読書はまだ無秩序に続けられ、あらたに熱心になった。私は何かを探した。私は垣間みた、私のものにように思えたその世界をまた見い出したかった。本から夢想へ少しずつ、ひとりで、また友のおかげで新たな空間を発見した。多くの年月の後にもこの見習いの素晴らしさを心に留めている。ある朝私はジッドの『(ナルシス) 論』を見つけた。二日後『愛の試み』を全部覚えていた。『放蕩息子の帰宅』は私が語らない本になった。その完璧さには口を閉ざす。私は友人と単に演劇にして後に上演した。その間私はジッドのすべての作品を読んだ。今度は『地の糧』からしばしば語った衝撃を受けた。しかし、私はそれを第二の出会いで受けた。たぶん最初に読んだ時私は若い教養のない野蛮人だったからと言えるだろう。しかし、またこの衝撃は私に関しては感覚の衝撃ではあり得なかったからだろう。異なった決定的な衝撃なのだった。ジッド自身がこの解釈を確認するよりずっと前に『地の糧』に私が必要としていた貧窮の福音書を読むことを学んだのだ。

その後ジッドは私の青春を占めていた。少なくとも一度は賞賛した人々、精神のそのような高見まで高めてくれたそういう人々にいつも感謝を持たないではいられない。しかしながら、それにもかかわらずジッドは私には思考の師でも著作の師でもなかった。私には他の師がいた。ジッドはむしろ私が言ったことのために芸術家の模範、王の息子、私が生きたいと願っていた庭の門を見張っていた。たとえば、ジッドが芸術について言ったことで、時代はその概念から離れたけれども、私が完全に賛成しないことは殆どなかった。ジッドの作品は時代の苦悩から離れていると非難されている。作家が偉大であるためには革命家でなくてはならないということを選択されている。しかし、作家が革命家である

としても、それは革命までだけであることを歴史が証明している。要するにジッドが時代から離れたか確かではない。もっと確かなことは時代が、ジッドが代表していたものから離れようとしたのである。問題は時代がそうなるかどうか、また自殺以外のやり方でそうなるかどうかを知ることである。知的であるために絶望的でなくてはならないという時代の偏見にもジッドは苦しんだ。議論はここではもっと容易である。この偏見はつまらないということである。

しかしながら私はジッドの例を忘れ、私は生まれた土地を離れたと同時に、無邪気な創造のこの世界から早くに無理矢理離なれなくてはならなかった。歴史は私の世代を拘束した。黒い歳月のポーチの前で待つ列の中で私も待たなくてはならなかった。それから私たちは歩み始め、まだ目的に達していない。どんなにそれから私は変わらなかったか。少なくとも私は人生を始めた光の充満を忘れなかったし、何よりそれを愛した。私はジッドとの関係を否認しなかった。

最も辛い時期の終わりに私はジッドにまた会った。その頃パリでジッドのアパートの一部に住んでいた。屋根のあるバルコニーのついたアトリエだった。最も特異なことは部屋の真ん中にブランコがぶらさがっていたことだ。私に会いに来たインテリがそれに乗っているのを見るのがいやになると、それを取り除いた。[…]

ジッドが私たちから離れた今日、領域の門のなじみの友に誰が代わりえるのだろう。私たちが戻り得る日まで誰が庭を見張るのだろう。少なくとも死までジッドは見張っていた。[…]

ジッドの秘密は懐疑の最中にも人間であるという誇りを決して失わなかったことである。死ぬことは最後まで担いたいと思っていたこの条件に入っていた。特権の中で生きた後死に震えたら何と言われたことだろう。その時こそジッドの幸せは盗んだものと示したことであろう。そうではなかった。ジッドは神秘にほほえみ、生に対して示したと同じ顔を深淵に示した。私たちはそうとは知らずにこの瞬間を待っていた。最後

にジッドは待ち合わせ通りだった。

この追悼文は、過酷な戦争の世代にとってジッドの文学が遠くなったという距離感、そしてそれでもそれが文学の根幹の一部をなしていたことを示している。1951年という第二次世界大戦後の世界観が強いとしても、直接続く後の世代がジッドの作品をどう読んだかをよく表している。ジッドの文学はさまざまな側面を持っている。カミュが取り上げているのはその一部であり、他の側面はカミュよりも後のヌーボーロマンにも受け継がれることになった。さらに、物語の復権や一人称小説という観点からも現代の文学を形成する重要な要素になっている。いずれにしても、こうしてランボーからジッドへ、そしてカミュへと『地の糧』の美学とも言うべきものが作られ、受け継がれていったと言えるだろう。